# 粒子系の古典論ノート

# xiupos

# 2024年10月29日

粒子系\*1の古典論の基本事項を体系的にまとめる.自分用のノートなので,正確性は保証されない.

## 0.1 最小作用の原理

まず, 粒子系の古典論において, 以下を原理として認める.

時間 t に依存する**一般化座標**と呼ばれるパラメータ  $q^1(t),\ldots,q^D(t)$  に対して,作用 action と呼ばれる汎関数  $S[q^i]$  が存在し<sup>a</sup>,物理現象において座標  $q^i$  は作用  $S[q^i]$  が最小となるような経路が選ばれる.

言いかえると, 時間  $t_1$  から  $t_2$  の運動において,  $q^i(t)\mapsto q^i(t)+\delta q^i(t)$  (ただし両端固定  $\delta q^i(t_1)=\delta q^i(t_2)=0$ ) なる経路の微小変換に対し, 作用が停留値を取る:

$$\delta S[q^i] \equiv S[q^i + \delta q^i] - S[q^i] = 0.$$

この古典的原理を最小作用の原理という.

 $^a$  正しくは  $S[q^1(t),\ldots,q^D(t)]$  と書かれるべきであるが, 配位空間に関する任意の列  $\{a^1,\ldots,a^D\}$  は単に  $a^i$  と書かれることが多い. この添字 i は添字集合  $\{a^i\}_{i=1}^D$  程度の意味であり, あまり気にしてはいけない.

系に対し適当な作用  $S[q^i]$ , あるいは次節の Lagrangian を決定するのが, 粒子系の古典論の本質と言えるだろう.

#### 0.1.1 例: 自由一次元一粒子系

質量 m の自由一次元一粒子系の作用は

$$S[q] = \frac{m}{2} \frac{(q(t_2) - q(t_1))^2}{t_2 - t_1}$$

である.

#### 0.1.2 例: 調和振動子

質量 m, 角振動数 ω の調和振動子の作用は

$$S[q] = \frac{m\omega}{2\sin\omega(t_2 - t_1)} \left[ (q(t_1)^2 + q(t_2)^2)\cos\omega(t_2 - t_1) - 2q(t_1)q(t_2) \right]$$

<sup>\*1</sup> ここでの「粒子系」は「(一般的な意味での) 場でない」程度の意味である. 厳密には粒子系も時間  $\mathbb{R}$  から配位空間  $\mathbb{R}^D$  への場  $q=(q^i):\mathbb{R}\to\mathbb{R}^D$  であるから,場の理論の特別な場合とも言える.

である. 上の例とあわせて, これらが  $\delta S[q^i] = 0$  を満たすことは明らかである.

# 0.2 Euler - Lagrange の運動方程式

系の作用を直接求めることは難しく、これから定義する Lagrangian を用いるのが便利である.

作用は, 座標と時間に関する Lagrangian  $L(q^i,\dot{q}^i,t)$  を用いて,

$$S[q^{i}] = \int_{t_1}^{t_2} dt L(q^{i}, \dot{q}^{i}, t).$$

と表される.

最小作用の原理に対し、この Lagrangian が満たすべき条件を求めよう.  $q^i\mapsto q^i+\delta q^i$  の変換に対し、作用の変化  $\delta S[q^i]=S[q^i+\delta q^i]-S[q^i]$  を計算すると、

$$\begin{split} \delta S[q^i] &= \int_{t_1}^{t_2} \mathrm{d}t \left[ L \bigg( q^i + \delta q^i, \dot{q}^i + \frac{\mathrm{d}\delta q^i}{\mathrm{d}t}, t \bigg) - L(q^i, \dot{q}^i, t) \right] \\ &= \int_{t_1}^{t_2} \mathrm{d}t \left[ \delta q^i \frac{\partial L}{\partial q^i} + \frac{\mathrm{d}\delta q^i}{\mathrm{d}t} \frac{\partial L}{\partial \dot{q}^i} \right] \\ &= \int_{t_1}^{t_2} \mathrm{d}t \left[ \delta q^i \frac{\partial L}{\partial q^i} - \delta q^i \frac{\mathrm{d}}{\mathrm{d}t} \bigg( \frac{\partial L}{\partial \dot{q}^i} \bigg) + \frac{\mathrm{d}}{\mathrm{d}t} \bigg( \delta q^i \frac{\partial L}{\partial \dot{q}^i} \bigg) \right] \\ &= \int_{t_1}^{t_2} \mathrm{d}t \, \delta q^i \bigg[ \frac{\partial L}{\partial q^i} - \frac{\mathrm{d}}{\mathrm{d}t} \bigg( \frac{\partial L}{\partial \dot{q}^i} \bigg) \bigg] + \bigg[ \delta q^i \frac{\partial L}{\partial \dot{q}^i} \bigg]_{t=t_1}^{t=t_2} \end{split}$$

となる. ここで, 第 2 項は両端固定の境界条件  $\delta q^i(t_1) = \delta q^i(t_2) = 0$  より消すことができて,

$$\delta S[q^i] = \int_{t_1}^{t_2} \mathrm{d}t \, \delta q^i \left[ \frac{\partial L}{\partial q^i} - \frac{\mathrm{d}}{\mathrm{d}t} \left( \frac{\partial L}{\partial \dot{q}^i} \right) \right]$$

となる.  $\delta q^i(t)$  は  $t_1 < t < t_2$  で任意だから, 原理  $\delta S[q^i] = 0$  より, 次の運動方程式が得られる.

最小作用の原理を満たすとき, Lagrangian  $L(q^i,\dot{q}^i,t)$  は **Euler – Lagrange の運動方程式** 

$$\frac{\partial L}{\partial q^i} - \frac{\mathrm{d}}{\mathrm{d}t} \left( \frac{\partial L}{\partial \dot{q}^i} \right) = 0$$

を満たす.

これにより, 変分条件  $\delta S[q^i]=0$  を満たす  $q^i(t)$  を求める問題は, Euler – Lagrange 方程式という微分方程式を解く問題と等価であることがわかった.

ところで, Lagrangian は一意ではない. Lagrangian  $L(q,\dot{q},t)$  に対し, 位置と時間の関数 f(q,t)

の時間に関する完全微分  $\mathrm{d}f(q,t)/\mathrm{d}t$  を加えた量

$$\begin{split} \tilde{L}(q, \dot{q}, t) &:= L(q, \dot{q}, t) + \frac{\mathrm{d}f(q, t)}{\mathrm{d}t} \\ &= L(q, \dot{q}, t) + \dot{q}^{j} \frac{\partial f(q, t)}{\partial q^{j}} + \frac{\partial f(q, t)}{\partial t} \end{split}$$

は同じ形の Euler - Lagrange の運動方程式を与える. 実際,

$$\frac{\partial \tilde{L}}{\partial q^{i}} = \frac{\partial L}{\partial q^{i}} + \dot{q}^{j} \frac{\partial^{2} f}{\partial q^{i} \partial q^{j}} + \frac{\partial^{2} f}{\partial q^{i} \partial t},$$

$$\frac{\mathrm{d}}{\mathrm{d}t} \left( \frac{\partial \tilde{L}}{\partial \dot{q}^{i}} \right) = \frac{\mathrm{d}}{\mathrm{d}t} \left( \frac{\partial L}{\partial \dot{q}^{i}} + \frac{\partial f}{\partial q^{i}} \right) = \frac{\mathrm{d}}{\mathrm{d}t} \left( \frac{\partial L}{\partial \dot{q}^{i}} \right) + \dot{q}^{j} \frac{\partial^{2} f}{\partial q^{j} \partial q^{i}} + \frac{\partial^{2} f}{\partial t \partial q^{i}}$$

であるから, 辺々引いて,

$$\frac{\partial \tilde{L}}{\partial q^i} - \frac{\mathrm{d}}{\mathrm{d}t} \left( \frac{\partial \tilde{L}}{\partial \dot{q}^i} \right) = \frac{\partial L}{\partial q^i} - \frac{\mathrm{d}}{\mathrm{d}t} \left( \frac{\partial L}{\partial \dot{q}^i} \right)$$

となり, L について Euler – Lagrange 方程式が成立するなら,  $\tilde{L}$  についても成立する.

# 0.2.1 例: 一次元一粒子系

一次元一粒子系の Lagrangian は

$$L(q, \dot{q}, t) = \frac{1}{2}m\dot{q}^2 - V(q)$$

で与えられる. ただし V(q) は系のポテンシャルである. ここで,

$$\frac{\partial L}{\partial q} = -\frac{\partial V}{\partial q}, \quad \frac{\mathrm{d}}{\mathrm{d}t} \left( \frac{\partial L}{\partial \dot{q}} \right) = \frac{\mathrm{d}}{\mathrm{d}t} = m\ddot{q}$$

であるから、Euler - Lagrange の運動方程式は、

$$m\ddot{q} + \frac{\partial V}{\partial a} = 0$$

と求まる. これは Newton の運動方程式として知られており, Lagrangian 決定の任意性を除けば, 最小作用の原理は物理原理として well-defined であることがわかる.

ポテンシャルが無い (V=0) ときの作用の表式を求める. 運動方程式  $m\ddot{q}=0$  を解いて,

$$\dot{q}(t) = \frac{q(t_2) - q(t_1)}{t_2 - t_1}$$

が得られる.したがって、作用は

$$S[q] = \int_{t_1}^{t_2} dt \, \frac{m}{2} \frac{(q(t_2) - q(t_1))^2}{(t_1 - t_2)^2} = \frac{m}{2} \frac{(q(t_2) - q(t_1))^2}{t_2 - t_1}$$

と求まる.

#### 0.2.2 例: 調和振動子

調和振動子の Lagrangian は,

$$L(q, \dot{q}, t) = \frac{1}{2}m\dot{q}^2 - \frac{1}{2}m\omega^2q^2.$$

で与えられる.ここで.

$$\frac{\partial L}{\partial q} = -m\omega^2 q, \quad \frac{\mathrm{d}}{\mathrm{d}t} \left( \frac{\partial L}{\partial \dot{q}} \right) = \frac{\mathrm{d}}{\mathrm{d}t} = m\ddot{q}$$

であるから、Euler - Lagrange の運動方程式は

$$m\ddot{q} + m\omega^2 q = 0$$

と求まる.

作用の表式を求める. 運動方程式を解いて、

$$q(t) = \frac{q_1 \sin \omega (t - t_2) - q_2 \sin \omega (t - t_1)}{\sin \omega (t_1 - t_2)},$$
$$\dot{q}(t) = \omega \frac{q_1 \cos \omega (t - t_2) - q_2 \cos \omega (t - t_1)}{\sin \omega (t_1 - t_2)}$$

が得られる. ただし,  $q_1 \equiv q(t_1)$ ,  $q_2 \equiv q(t_2)$  とした. したがって, 作用は,

$$\begin{split} S[q] &= \int_{t_1}^{t_2} \mathrm{d}t \, \frac{m}{2} \bigg[ \bigg\{ \omega \frac{q_1 \cos \omega(t-t_2) - q_2 \cos \omega(t-t_1)}{\sin \omega(t_1-t_2)} \bigg\}^2 - \omega^2 \bigg\{ \frac{q_1 \sin \omega(t-t_2) - q_2 \sin \omega(t-t_1)}{\sin \omega(t_1-t_2)} \bigg\}^2 \bigg] \\ &= \int_{t_1}^{t_2} \mathrm{d}t \, \frac{m\omega^2}{2} \frac{q_1^2 \cos 2\omega(t-t_2) + q_2^2 \cos 2\omega(t-t_1) - 2q_1q_2 \cos(2t-t_1-t_2)}{\sin^2 \omega(t_2-t_1)} \\ &= \frac{m\omega}{2 \sin \omega(t_2-t_1)} \Big[ (q_1^2 + q_2^2) \cos \omega(t_2-t_1) - 2q_1q_2 \Big] \end{split}$$

と求まる.

## 0.3 Noether の定理

Lagrangian は運動方程式を与えるだけでなく、系の対称性に関する情報も持っている. 時間と座標の連続変換に対し作用が不変であるとき、系には対応する不変量が存在することが知られている. この定理は Noether の定理と呼ばれている.

時間の微小変換  $t\mapsto t'=t+\delta t$  に対し, 座標が  $q^i(t)\mapsto q'^i(t')=q^i(t)+\delta q^i(t)$  と変換される

とする. このとき  $t_1 < t < t_2$  の作用の変化  $\delta S[q^i(t)] = S[q'^i(t')] - S[q^i(t)]$  を計算すると,

となる. ここで, 最後の式の第一項は Euler – Lagrange の運動方程式より消え, 第二項の  $t_1$ ,  $t_2$  は任意である $^{*2}$ . したがって, この変換に対し作用が不変  $\delta S=0$  であるとすると, 対応する保存量が得られる.

 $<sup>^{*2}</sup>$  最小作用の原理の場合と違い、このときの  $\delta q^i$  は両端固定でない。そのため、Euler-Lagrange の運動方程式の際に消えた発散項を、今回の場合は消すことができない。

時間の微小変換  $t\mapsto t'=t+\delta t$  に対し、座標が  $q^i(t)\mapsto q'^i(t')=q^i(t)+\delta q^i(t)$  と変換されるとき、作用が不変であるならば、量

$$\delta Q \equiv \delta q^i p_i - \delta t H \equiv \delta q^i \frac{\partial L}{\partial \dot{q}^i} - \delta t \left( \frac{\partial L}{\partial \dot{q}^i} \dot{q}^i - L \right)$$

は保存する (Noether の定理 Noether's theorem):

$$\frac{\mathrm{d}\delta Q}{\mathrm{d}t} = 0, \quad (\Leftrightarrow \delta Q = \text{const.})$$

ここで,量

$$p_i \equiv \frac{\partial L}{\partial \dot{q}^i}, \quad H \equiv \dot{q}^i \frac{\partial L}{\partial \dot{q}^i} - L = \dot{q}^i p_i - L$$

はそれぞれ一般化運動量, Hamiltonian と呼ばれる (後述).

### 0.3.1 例: 空間並進に対する不変量

空間並進  $t\mapsto t'=t, q^i(t)\mapsto q'^i(t')=q^i(t)+\varepsilon^i$  に対し、作用が不変であるとき、一般化運動量は保存する:

$$\delta Q = \varepsilon^i p_i = \text{const.}$$
  $\therefore p_i = \text{const.}$ 

#### 0.3.2 例: 時間並進に対する不変量

時間並進  $t\mapsto t'=t+\varepsilon, q^i(t)\mapsto q'^i(t')=q^i(t)$  に対し、作用が不変であるとき、Hamiltonian は保存する:

$$\delta O = -\varepsilon H = \text{const.}$$
 :  $H = \text{const.}$ 

#### 0.3.3 例: 空間回転に対する不変量

3 次元空間での一粒子を考える. 正規直交座標系 q=x を取り, 空間回転  $t\mapsto t'=t$ ,  $x(t)\mapsto x'(t')=R(\varepsilon)x(t)=x(t)-\varepsilon\times x(t)$  に対し, 作用が不変であるとき, 対応する保存量 L は角運動量と呼ばれる:

$$\delta Q = (-\varepsilon \times \mathbf{x}) \cdot \mathbf{p} = -\varepsilon \cdot (\mathbf{x} \times \mathbf{p}) = \text{const.}$$
$$\therefore \mathbf{L} \equiv \mathbf{x} \times \mathbf{p} = \text{const.}$$

## 0.4 Hamilton - Jacobi 方程式

前節で導入された Hamiltonian は, Lagrangian を Legendre 変換したものであり, 系に関して Lagrangian と同程度の情報を持つ. 以降, Hamiltonian の性質について詳しくみていく\*3.

<sup>\*&</sup>lt;sup>3</sup> Lagrangian を用いた議論を「Lagrange 形式」, Hamiltonian を用いた議論を「Hamilton 形式」と呼ぶことがある.

Lagrangian L が与えられたとき,  $q^i$  に対して

$$p_i \equiv \frac{\partial L}{\partial \dot{q}^i}$$

を一般化運動量、または  $q^i$  に共役な運動量 $\underline{conjugate\ momentum}$  といい、一般化座標とそれに共役な運動量の組  $(q^i,p_i)$  を正準変数  $\underline{canonical\ variables}$  という.

Lagrangian L と正準変数  $(q^i, p_i)$  が与えられたとき $^a$ ,

$$H(q^i, p_i, t) \equiv \dot{q}^i p_i - L$$

を Hamiltonian という.

 $^a$  たとえば  $p_i = \partial L(q^i, \dot{q}^i, t)/\partial \dot{q}^i$  を逆に解いて  $p_i = \dot{q}_i = (q_i, p_i, t)$  が得られたとき.

一般化運動量と Hamiltonian は作用を端点で偏微分して

$$p_i(t) = \frac{\partial S}{\partial q^i(t)}, \quad H(q^i, p_i, t) = -\frac{\partial S}{\partial t}$$

と得ることもできる. ただし作用は  $S[q^i]=\int_{t_0}^t \mathrm{d}t'\,L(q^i,\dot{q}^i,t')$  で与えられている. 実際, Norther の定理と同じ状況での変分は

$$\delta S[q^{i}] = \left[\delta q^{i} p_{i} - \delta t H\right]_{t'=t_{0}}^{t'=t}$$

である. このときの始点での変位を  $\delta t(t_0) = \delta q^i(t_0) = 0$  とすれば,

$$\delta S[q^i] = \delta q^i p_i - \delta t H$$

となる. この変分は経路の始点と途中  $t' \in [t_0,t)$  によらない形になっているから, 一点 t での変位から求めたい全微分

$$\mathrm{d}S = \mathrm{d}q^i \ p_i - \mathrm{d}t H$$

が得られる.

これらの性質を組み合わせることで以下の方程式が得られる.

最小作用の原理を満たす作用  $S[q^i]=\int_{t_0}^t \mathrm{d}t'\,L(q^i,\dot{q}^i,t')$  に対し、作用の端点 t,q(t) での偏微分は **Hamilton – Jacobi 方程式**Hamilton – Jacobi equation

$$H\left(q^{i}(t), \frac{\partial S}{\partial q^{i}(t)}, t\right) + \frac{\partial S}{\partial t} = 0$$

を満たす.

## 0.5 Hamilton の運動方程式

Lagrangian の場合と同様に, 最小作用の原理に対し Hamiltonian が満たす条件を求めよう. Hamiltonian  $H(q^i,p_i,t) \equiv \dot{q}^i p_i - L$  の全微分は,

$$\begin{split} \mathrm{d}H &= \dot{q}^i \, \mathrm{d}p_i + p_i \, \mathrm{d}\dot{q}^i - \mathrm{d}L \\ &= \dot{q}^i \, \mathrm{d}p_i + p_i \, \mathrm{d}\dot{q}^i - \frac{\partial L}{\partial q^i} \, \mathrm{d}q^i - p_i \, \mathrm{d}\dot{q}^i - \frac{\partial L}{\partial t} \, \mathrm{d}t \\ &\left( \because \mathrm{d}L = \frac{\partial L}{\partial q^i} \, \mathrm{d}q^i + \frac{\partial L}{\partial \dot{q}^i} \, \mathrm{d}\dot{q}^i + \frac{\partial L}{\partial t} \, \mathrm{d}t \right) \\ &= -\frac{\partial L}{\partial q^i} \, \mathrm{d}q^i + \dot{q}^i \, \mathrm{d}p_i - \frac{\partial L}{\partial t} \, \mathrm{d}t \end{split}$$

である. ここで, Euler-Lagrangian 方程式が成立するとき  $\dot{p}_i = \partial L/\partial q^i$  であることを用いると, Hamiltonian に関する運動方程式が得られる.

最小作用の原理を満たすとき, Hamiltonian は以下の **Hamilton の運動方程式**あるいは**正準 方程式** canonical equation

$$\dot{p}_i = -\frac{\partial H}{\partial q^i}, \quad \dot{q}^i = \frac{\partial H}{\partial p_i}$$

を満たす.

Lagrangian が時間に陽に依存しないとき, Hamiltonian

$$\frac{\partial H}{\partial t} = -\frac{\partial L}{\partial t} = 0$$

は保存する. 時間並進に対して作用が不変であるから, 前述の Noether の定理の結果とも一致する.  $q^i(t)$  と  $p_i(t)$  を独立にした作用

$$S[q^{i}, p_{i}] = \int_{t_{1}}^{t_{2}} dt \left[ \dot{q}^{i}(t) p_{i}(t) - H(q^{i}(t), p_{i}(t), t) \right]$$

も用いられる.このときの最小作用の原理は

$$\delta S[q^i,p_i] = S[q^i + \delta q^i,p_i + \delta p_i] - S[q^i,p_i] = 0$$

で表される.

#### 0.5.1 例: 一次元一粒子系

一次元一粒子系の Lagrangian は,

$$L(q, \dot{q}, t) = \frac{1}{2}m\dot{q}^2 - V(q)$$

であった.一般化運動量の定義より,

$$p = \frac{\partial L}{\partial \dot{q}} = m\dot{q}$$

である. したがって  $\dot{q} = p/m$  であるから, Hamiltonian の定義より,

$$H(q, p, t) = \frac{p}{m}p - L\left(q, \frac{p}{m}, t\right) = \frac{p^2}{2m} + V(q)$$

と求まる.ここで、

$$\frac{\partial H}{\partial q} = \frac{\mathrm{d}V}{\mathrm{d}q}, \quad \frac{\partial H}{\partial p} = \frac{p}{m}$$

であるから、Hamilton の運動方程式は、

$$\dot{p} = -\frac{\mathrm{d}V}{\mathrm{d}q}, \quad \dot{q} = \frac{p}{m}$$

と得られる.

#### 0.5.2 例: 調和振動子

調和振動子の Lagrangian は,

$$L(q, \dot{q}, t) = \frac{1}{2}m\dot{q}^2 - \frac{1}{2}m\omega^2q^2$$

であった.一般化運動量の定義より,

$$p = \frac{\partial L}{\partial \dot{q}} = m\dot{q}$$

である. したがって  $\dot{q} = p/m$  であるから, Hamiltonian の定義より,

$$H(q, p, t) = \frac{p}{m}p - L(q, \frac{p}{m}, t) = \frac{p^2}{2m} + \frac{1}{2}m\omega^2q^2$$

と求まる.ここで.

$$\frac{\partial H}{\partial q} = m\omega^2 q, \quad \frac{\partial H}{\partial p} = \frac{p}{m}$$

であるから、Hamilton の運動方程式は、

$$\dot{p} = -m\omega^2 q$$
,  $\dot{q} = \frac{p}{m}$ 

と得られる.

### 0.6 正準変換

正準変数の変換  $(q^i, p_i) \mapsto (q'^j, p'_j) = (q'^j(q^i, p_i), p'_j(q^i, p_i))$  に対して Hamiltonian が  $H(q^i, p_i, t) \mapsto H'(q'^j, p'_j, t)$  と変換されるとき、この正準変数の変換を**正準変換** canonical transformation という. いずれの表示でも最小作用の原理を満たすとき、Hamiltonian の定義 から、

$$\begin{split} \delta S[q^i,p_i] &= \delta \int \mathrm{d}t \, (\dot{q}^i p_i - H) = 0, \\ \delta S'[q'^i,p'_i] &= \delta \int \mathrm{d}t \, (\dot{q}'^i p'_i - H') = 0. \end{split}$$

したがって, ある関数 Wが存在して,

$$(\dot{q}^i p_i - H) - (\dot{q}'^i p_i' - H') = \frac{\mathrm{d}W}{\mathrm{d}t}.$$
  
$$\therefore \mathrm{d}W = p_i \, \mathrm{d}q^i - p_i' \, \mathrm{d}q'^i - (H - H') \, \mathrm{d}t.$$

または, 両辺に  $d(q'^i p_i')/dt$  を足して,

$$(\dot{q}^i p_i - H) - (-q'^i \dot{p}'_i - H') = \frac{\mathrm{d}}{\mathrm{d}t} (W + q'^i p'_i) = : \frac{\mathrm{d}W'}{\mathrm{d}t}.$$
  
$$\therefore \mathrm{d}W' = p_i \, \mathrm{d}q^i + q'^i \, \mathrm{d}p'_i - (H - H') \, \mathrm{d}t.$$

これら $W(q^i,q'^i,t)$ , $W'(q^i,p_i',t)$ をどちらも母関数といい,以下を満たす.

$$\begin{split} p_i &= \frac{\partial W}{\partial q^i}, \quad p_i' = -\frac{\partial W}{\partial q'^i}, \quad H' = H + \frac{\partial W}{\partial t}, \\ p_i &= \frac{\partial W'}{\partial q^i}, \quad q'^i = \frac{\partial W'}{\partial p_i'}, \quad H' = H + \frac{\partial W'}{\partial t}. \end{split}$$

## 0.7 Poisson 括弧

正準変数  $(q^i,p_i)$  に対し, **Poisson 括弧** Poisson braket は以下で定義される演算である:

$$\{A, B\}_{P} \equiv \frac{\partial A}{\partial q^{i}} \frac{\partial B}{\partial p_{i}} - \frac{\partial B}{\partial q^{i}} \frac{\partial A}{\partial p_{i}}.$$

正準変数自身は以下を満たす:

$$\{q^i, p_i\}_P = \delta^i_i, \quad \{q^i, q^j\}_P = \{p_i, p_i\}_P = 0.$$

また、Hamilton の運動方程式は以下のように書き換えられる:

$$\frac{\mathrm{d}q^i}{\mathrm{d}t} = \{q^i, H\}_{\mathrm{P}}, \quad \frac{\mathrm{d}p_i}{\mathrm{d}t} = \{p_i, H\}_{\mathrm{P}}.$$

より一般に, 正準変数と時間に関する物理量  $A(q^i,p_i,t)$  について, 時間微分に関して以下が成立する:

$$\frac{\mathrm{d}A}{\mathrm{d}t} = \{A, H\}_{\mathrm{P}} + \frac{\partial A}{\partial t}.$$

実際, Aの時間による完全微分は,

$$\begin{split} \frac{\mathrm{d}A}{\mathrm{d}t} &= \frac{\partial A}{\partial q^i} \dot{q}^i + \frac{\partial A}{\partial p_i} \dot{p}_i + \frac{\partial A}{\partial t} \\ &= \frac{\partial A}{\partial q^i} \frac{\partial H}{\partial p_i} - \frac{\partial A}{\partial p_i} \frac{\partial H}{\partial q^i} + \frac{\partial A}{\partial t} \\ &= \{A, H\}_{\mathrm{P}} + \frac{\partial A}{\partial t}. \end{split}$$

この式は、物理量 A の全時間発展が Hamiltonian H によって記述されることを意味している. また、Poisson 括弧は以下の性質を満たす:

1. 双線型性:  $\{aX + bY, Z\}_P = a\{X, Z\}_P + b\{Y, Z\}_P, \{X, aY + bZ\}_P = a\{X, Y\}_P + b\{X, Z\}_P$ 

- 2. 交代性:  $\{X, Y\}_P = -\{Y, X\}_P$ ,
- 3. **Jacobi** 律:  $\{X, \{Y, Z\}_P\}_P + \{Y, \{Z, X\}_P\}_P + \{Z, \{X, Y\}_P\}_P = 0.$

したがって、Poisson 括弧は Lie 代数の括弧積である.

# 0.8 参考文献

- ランダウ, L., リフシッツ, E. 『力学』(広重 徹, 水戸 巌訳, 東京図書, 2008)
- 井田大輔『現代解析力学入門』(朝倉書店, 2020)
- 高橋 康, 柏 太郎『量子場を学ぶための場の解析力学入門 増補第 2 版』(講談社サイエンティフィク, 2005)
- 柏 太郎 『新版 演習 場の量子論』 (サイエンス社, 2006)